

こんにちは、嘱託員の鈴木です。少しずつ秋の気配を感じるようになりましたね。

さて、先週8月26日（金曜日）から、青森市民図書館内の展示をリニューアルしました！

テーマは「あおもり遊覧—浅虫・八甲田」で、7階廊下の展示ケースに青森市の観光に関する資料を展示しました。今回はインターンシップで来られた青森公立大学の学生さんたちにもお手伝いいただき、小規模ながら楽しい展示になったと思います。

内容は大きく3つ。まずは、風光明媚な海の景勝地「浅虫」、そしてハイキングやスキーを楽しめる山の行楽地「八甲田」を取り上げました。それに観光のもうひとつの楽しみ「おみやげ」です。



展示のようす

今回、浅虫のコーナーでは、「あおもり歴史トリビア」第205号（2016年4月15日配信）でご紹介した『浅虫温泉名所図絵』（大正12年8月発行）を展示しています。これは発行者の一人、洞口長次郎の作画による緑と紅の色合いが美しい絵図で、海の名所だけでなく後背地の馬場山遊園地や旅館、商店、銀行なども描かれています。浅虫を訪れた観光客にはとても喜ばれたことでしょう。



『浅虫温泉名所図絵』
（部分、歴史資料室蔵）

それから、裸島の前には東北帝国大学理学部の浅虫臨海実験所と、昭和 59 年（1984）3 月に閉館するまで長く市民に親しまれた附属水族館が描かれています。これらは大正 11 年（1922）に設置が決定し同 13 年 7 月に開館したので、この時点では未完成でしたが、全国的に珍しい施設の建設に浅虫の人々の期待が大きかったのでしょう。



東北帝国大学理学部浅虫臨海実験所
(歴史資料室蔵)

一方、裏面には都々逸、^{どどいつ}鴨緑江節、^{おうりょっこうぶし}旅館の広告などが印刷されています。都々逸とは、男女の情愛などを 7・7・7・5 の 26 文字で粋に表現した定型詩で、当時流行した俗謡の鴨緑江節とともに、大正期の浅虫温泉のにぎやかなお座敷が目浮かぶようです。

この都々逸と鴨緑江節の選者は郡場秋蝶（徹）です。都々逸・川柳作家の秋蝶は、弘前大学 2 代目学長となった植物学者の郡場寛の弟で、東奥日報社の記者をしながら県下都々逸大会や『東奥日報』の「募集都々逸」欄の選者を務めるなど、大正期の青森県で都々逸の振興に努めました。

また、カメラが一般に普及していない時代、絵はがきもおみやげ品として人気がありました。旅の思い出に買い求めたり、旅先から知人に出したりと絵はがきの需要は多かったことでしょう。

今回は、昭和初期頃の浅虫や八甲田の景観、それから昭和 20 年代後半の青森市街地を写した着色絵はがきも展示していますので、市民図書館へおいでの際は、ぜひお立ち寄りいただければと思います。